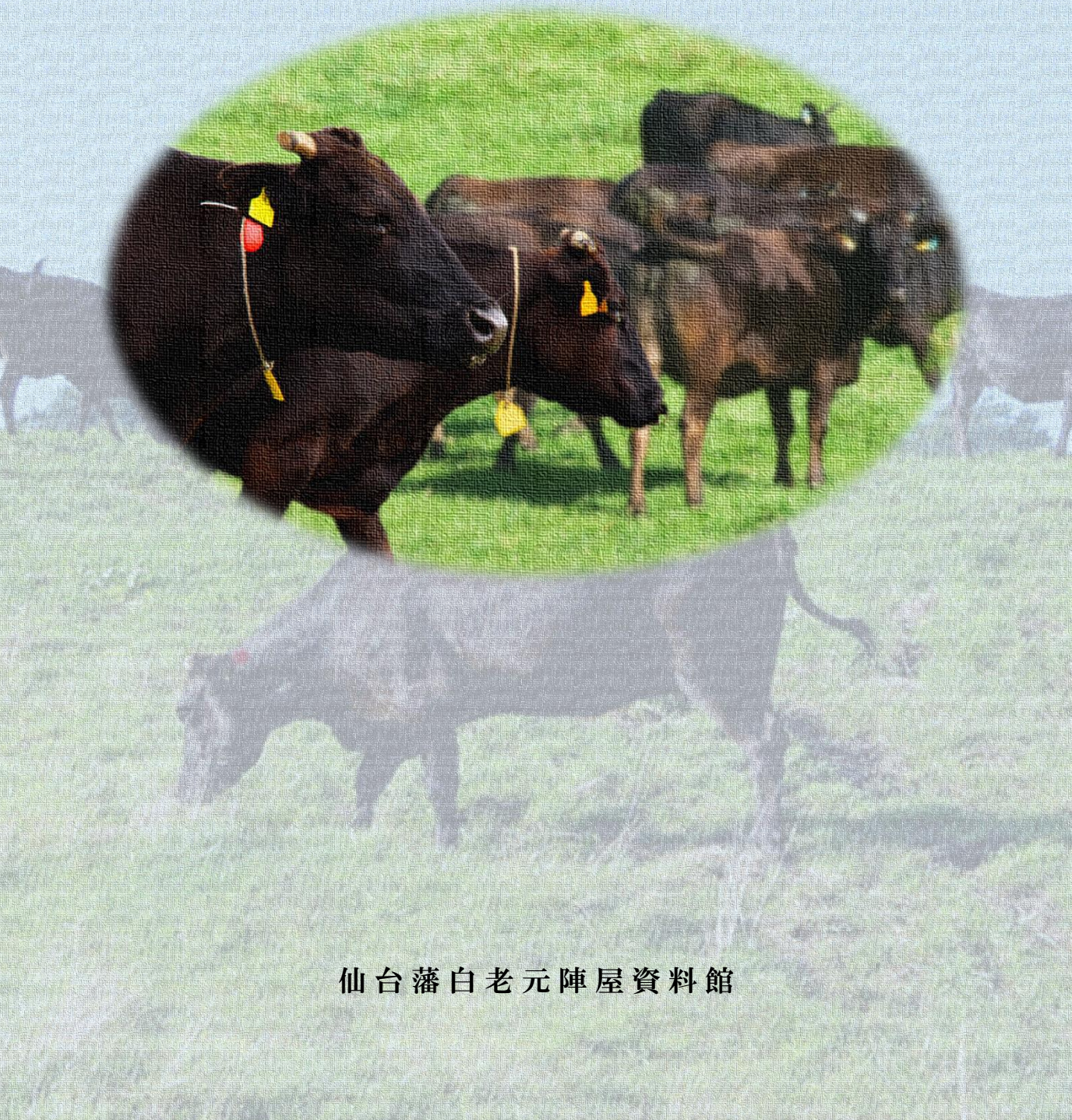
ふるさと再発見シリーズ 8

黒毛和牛の事始め



仙台藩白老元陣屋資料館

はじめに

昭和29(1954)年10月、島根県から北海道初となる黒毛和種44頭が白老町に到着しました。

白老町には広大な土地を利用した乳牛や軍用馬の畜産が根付いていましたが、太平洋戦争の終結によって特に軍用馬の需要が減少したことに加え、悪天候による農業被害、漁獲量の減少が重なり、従来の産業基盤や経済力の弱体化が懸念されていました。

昭和27(1952)年、島根県から和牛の売込みのための一団が来町します。これを機に、当時の町長であった浅利義市氏が自ら島根県へ赴き、和牛導入の実現に向けた検討と調整を進めることとなりました。

北海道初の試みであった和牛の導入は、紆余曲折を経ながらも白老町に定着し、「白老牛」は今や、北海道を代表する一大ブランドとなりました。

ふるさと再発見シリーズ８では、昭和33(1958)年に技術指導のため島根県から移住された堀尾博義氏にお話を聞きながら、導入にまつわるエピソードを中心にご紹介します。

■もくじ■

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
白老牛導入70年のあゆみ(表)・・・・・・・・・・・・・・2
本文・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
コラム①　『和牛導入時の畜産業の概況』・・・・・・・・5
コラム②　『和牛飼育定着のための政策』・・・・・・・・8
和牛導入から20年間の飼養状況の推移(表)・・・・・・・9
和牛導入から20年間の地区別使用状況の推移(表)・・・・9
和牛導入の20年後における町営牧場利用状況(表)・・・・10
コラム③　『しまね和牛』・・・・・・・・・・・・・・・10

堀尾博義（ほりおひろよし）

○1937(昭和12)年生まれ。島根県出身。

○1958(昭和33)年に、黒毛和牛生産技術指導員として白老町に移住。

○定年により退職後、**100年後の子どもたちに森を残すため**、森野の土地を購入。“仙人の森”作りを続けている。

白老牛導入70年のあゆみ		
年　代		主　な　で　き　ご　と
昭和	29(1954)	北海道初となる黒毛和牛44頭を導入
	31(1956)	島根県より藤井善明技師が着任
		白老町和牛生産協同組合設立
	32(1957)	人工授精用種雄牛「田中号」を導入し、白老八幡神社裏に和牛人工授精所を建設
	33(1958)	和牛子牛を初めて販売。山形県家畜商業協同組合が購入
		島根県より堀尾博義技師が着任
	35(1960)	町営ヨコシベツ牧場が開牧
	41(1966)	第４回北海道総合畜産共進会に２頭を出品
	42(1967)	肉用牛増殖地域指定を受け、肉用牛振興計画を策定
	43(1968)	第10回胆振総合畜産共進会を白老町で開催
		「北海道開基100年記念総合畜産共進会」において本町出品の「くらふみ号」が最高位賞を受賞
		白老町肉用牛繁殖育成センターが完成し、業務を開始
	44(1969)	白老町黒毛和種改良同志会が設立
		ホクレン農業協同組合が開設者となり、白老広域肉用牛市場がスタート
	46(1971)	全国和牛登録協会主催の協議会が開催され、道生産者代表として本町より２名が出席
	47(1972)	第２回北海道肉用牛共進会において、本町より出品の「よしひめ号」が最高位賞を受賞
	48(1973)	第２次白老町肉用牛生産振興計画を策定
		第３回北海道肉用牛共進会において、本町より出品の「ふくまつ号」が最高位賞を受賞
	49(1974)	白老地区畜産基地建設調査計画が開始
		北海道農業祭総合畜産共進会において、本町より出品の「たけちよ号」が最高位賞を受賞
		和牛導入20周年記念式典において、白老町農業協同組合によって和牛導入に尽力した浅利義市町長の功績を称え、胸像を建立
	50(1975)	浅利義市氏が町長退任に伴い白老和牛生産組合長を退任、阿部春雄氏が新たな組合長に就任
		白老町和牛生産改良組合発足
	52(1977)	有珠山噴火。降灰は少なく被害軽微
		第３回全国和牛能力共進会(宮崎県)に本町より６頭を出品

白老牛導入 70 年のあゆみ		
年　代		主　な　で　き　ご　と
昭和	55(1980)	白老地域畜産基地建設事業完成祝賀会開催
	56(1981)	２年連続となる冷害。農業経営自立安定資金を導入
	57(1982)	第４回全国和牛労力共進会(福島県)に本町より16頭を出品
	60(1985)	第２回東日本和牛能力共進会(宮城県)に本町より６頭を出品し、名誉賞を受賞
	62(1987)	第５回全国和牛能力共進会(島根県)に本町より３頭を出品し、農林大臣賞受賞
	63(1988)	農畜産物自由化により牛肉の自由化が決定
平成	元(1989)	第１回「白老牛肉まつり」をふれあい広場で開催
		第３回東日本和牛能力共進会(福島県)に本町より６頭を出品
	3(1991)	第３回「白老牛肉まつり」にマスコットキャラクター「べこ丸」が初登場
	5(1993)	第５回「白老牛肉まつり」の会場を白老川河川敷に移設
	6(1994)	和牛の遺伝子海外流出問題が浮上
	12(2000)	宮崎県の牛農家で92年振りとなる口蹄疫が発生
		農事組合法人白老牛改良センター設立
		白老牛改良センター建設
	13(2001)	千葉県の酪農家で国内初のBSE(牛海綿状脳症)が発生
		白老牛改良センターから飼育牛を初出荷
	16(2004)	町制施行50周年式典及び白老牛導入50周年記念式典を挙行
	18(2006)	白老牛商標登録(図形商標)が認証
	20(2008)	北海道洞爺湖サミットで白老牛が使用され、認知度が急上昇
	21(2009)	白老牛のブランド管理団体として「白老牛銘柄推進協議会」設立
	22(2010)	北海道枝肉共励会において白老牛が最優秀賞を受賞
	25(2013)	生産基盤及び販売戦略を検討する「白老牛生産・販売戦略会議」設立
	26(2014)	バンコクにおいて初の海外輸出及びPR事業を実施
	29(2017)	「和牛サミット in MATSUSAKA」に北海道代表和牛ブランドとして参加

◆白老に黒毛和牛が導入されてから70年となりますが、改めて白老と島根県が結びついたきっかけは何だったのでしょうか？

「牛の飼育と稲作はもともと神代の時代からの関係で、田んぼを耕して米は人が食べ、稲わらは牛が食べる、この関係が繰り返されてきました。しかし、昭和25(1950)年頃から耕運機が登場し、機械化の時代が来ました。

戦後も農家では子牛を売って生計に加えていましたが、機械化が進むと牛の需要が減ってしまいます。農家にとって牛は貴重品で、価値観からすれば娘を嫁に出すくらいの大きな出来事。牛飼いが牛を引っ張って帰るときには、道端に立ってみんなで見送っていました。それだけ人と牛が近しい関係だったわけです。

しかし、単純に機械化すればよいという話でもありません。米を脱穀した後には稲わらが残りますが、牛がいなければ使い道がなくなる。牛がいなければ循環できなくなってしまいます。そのため、島根県では肉牛の販路拡大を図りますが、一方で北海道からは乳牛を導入することで解決を試みたようです」

◆新規市場を北海道に求めただけでなく、時代の変化にあわせた改革を図っていたのですね？

「昭和27年、島根県議の一団が北海道で肉牛のキャンペーンを行うことになり、白老へはその一環で訪れたわけですが、その後、当時の浅利義市白老町長も自ら島根を視察しています。ちょうど寒い季節だったらしく、和牛を山野に放し飼いにしている光景を見てきたようです。白老では馬産で馴染み深いと思いますが、馬がこの放牧の形式でした。これが、浅利町長に強い印象を与えたのではないでしょうか。

白老では乳牛の生産が行われていましたが、必ずしも大規模ではない。せいぜい５頭前後です。大規模にすると設備投資や乳搾りの手間が増える。白老では漁の不振も重なり、船子（船長の指揮下にある人。水夫。船方。）の要らない小さな漁

船の持ち主は特に困窮していたようです。

　つまり手間や初期費用を掛けずとも、白老の風土にあわせた飼育が可能と判断されたのだと思います。もちろん軌道に乗るまでは紆余曲折はありましたが、直感というか、見解というかは正しかったのだと思います」

コラム①
『和牛導入時の畜産業の概況』

　昭和29(1954)年に白老町が肥育に着手するまで、北海道では和牛生産は未開発であり、生産基盤もまったく整っていませんでした。白老町も従来は酪農や馬産が主であり、開墾や地味の増強を兼ね合わせた有畜農業を展開していました。昭和２(1927)年の「第二期北海道拓殖計画」では、本格的な乳牛の飼育と甜菜（てんさい）の作付けが試みられています。

　太平洋戦争が終結したことで軍馬の需要がなくなり、追い打ちかけるかのように物価高騰に見舞われるなか、乳牛の頭数が増加し、同30年代半ばにピークを迎えました。しかし、火山灰土壌が占める白老では農業そのものがふるわず、加えて風水害や冷害が重なっていました。

◆畜産未経験者の参入や乳牛からの転換だけでなく、馬から牛、漁師から畜産への転換もあったのですね。

「乳牛から肉牛への転換は少し時間がかかりました。乳牛を飼っていた人は設備もあるし、機械や畑も備えていましたので、急いで肉牛を求めなくてもよかった。５頭もいれば生計が成り立つ時代で、ただし機材のメンテナンスや搾乳の手はかかる。乳牛からの乗り換えは肉牛に値段がつくようになってからで、少しずつ肉牛の頭数の割合が増えていったのです。

　漁師から和牛飼育に移った人も、冬は餌の確保がゆるくありませんでしたし、さらに昭和35(1960)年には大昭和製紙が工場を建てたことで、白老の産業が大きく変化します。畜産業を取巻く環境もまた変化したんですよね」

◆道内の動きはどうでしたか。

「白老以外の地域では昭和30年代の後半から、各地で肉牛農家が登場するようになりますが、戦後移住の開拓農家が多い印象でした。裸一貫で移住して、

北海道の子返し制度を活用するのですが、あまり長続きはしなかった。

その後、今度は深川などの水田地帯で肉牛飼育を始めるようになります。本州のような生業や環境が北海道に登場することで、和牛を飼う動機や必要性が生じたわけです。導入の時期や背景、定着の度合いが、白老は他と異なっていました。そして、現在こそ専業的に飼育されていますが、当時は兼業的というか、複合的に飼育されていました」

◆白老までの運搬は汽車でしたよね。

「青函連絡船に貨車と一緒に海を渡りますので、島根から白老までは１週間ほどかかりました。牛にとっても負担が大きく、乳牛に比べると体格も小さいですから、竹浦に到着した牛を初めて見た人のなかには、話が違うと帰ってしまう人もいたそうです。

白老町は独自に子返し制度（P9のコラム②を参照）を設け、飼育者の参加を募りました。白老町の１年間の税収が１千万円程の時代に、５年間でほぼ同額を肉牛定着のための政策に割いたのですから、相当の手腕と決断力だったわけです。しかも北海道初の、手探りの状態です」

◆定着するまでに何か特徴的な出来事はありましたか？

「既存の農家、開拓農家、漁師出身で大体分けられますが、既存農家はそこそこの基盤があり、開拓農家は厳しかった。漁師の人たちは現在のように沿岸が痩せてなくて、雪も少ないから、長いロープに牛を繋げて放し飼いのようにしていました。１番苦労していたのはやはり開拓農家の人たちだったと思います。

一方で、町は昭和35年に町営牧場を開き、放牧可能な土地を用意しました。雪が少なくて笹が多い白老では、他の町村に比べるとかなり長い期間の放牧が可能でした。これが白老で和牛飼育が定着した大きな理由だったと思いま

す。また、当時は子牛を売る販路が確立される前でしたので、白老町では現在の町立病院がある敷地で市場を開き、ここは戦前から馬用の市場でしたが、ここに東北地方の買い手を招きました。

やがて白老川左岸の河川敷に設けられた町営の家畜市場に移っていきますが、道内の買い手が増えるのは昭和40年代の半ばでしたので、本当に初期ルートの支援は大きかったと思います。白老以外の農家も受け入れ、肉牛市場の牽引的な役割も果たしていました。この頃には殆ど馬の売買はなくなり、黒毛和牛とホルスタインの雄、つまり肉牛一色の市場になっていました」

▲家畜市場の様子(赤丸が黒毛和牛)

◆堀尾さんのお仕事について教えてください。

「私は昭和33(1958)年に白老へ来ました。ちょうど20歳で、25年くらい勤めました。白老から島根県庁へ技術指導者の派遣を照会されたようですが、よく島根県も私みたいな若者を選出したな、と思います。

仕事はとにかく、行政の仕事と農業の仕事の両方でした。牛の貸付けとか、市場のこととか。私は人工授精師の資格を持っているので牛の種付けをやったりとか。ありとあらゆる事をやっていました」

◆白老には他にできる人がいなかった？

「いなかった。和牛に関係する事を一手に担当していた。人工授精の施設がハ

幡神社の裏手、「牛の里」の辺りにありました。当時は道路もなくて、葦ばかりで何もなかった。

浅利町長が白老和牛生産組合という組織の組合長になって、町が丸抱えするような形である程度、市場が成り立つまで運用してから農協へ移管しました。人工授精施設も町が建てています」

▲白老川河川敷に建てられた家畜市場

◆当時の白老はどんな街並みでしたか？

「私が着任した昭和33年の4月8日という日付は、はっきり覚えています。島根では桜も終わっていて、それで白老はけっこう寒くて、風が冷たい日でした。商店街や農家のことはあまり覚えていない。前年に北海道へ来ていて、何となくイメージがあったからだと思います。

そのときは乳牛の買付けが目的で、買付けた乳牛を貨車で本州まで運びました。行きの旅費だけ貰って、帰りは牛と一緒の貨車で帰ります。白老へ来る前の職場は、けっこう北海道へ若い人を送っていたんです。研修を兼ねてね。それで、機会があったら北海道へ行こうと考えていたんだと思いますよ」

コラム②
『和牛飼育定着のための政策』

導入した黒毛和牛を定着させるため、白老町では様々な政策が展開されています。

◇子返し制度

昭和26(1951)年制定の「家畜管理条例」に基づく政策です。農家へ牝牛を貸付け、定められた期間内に産まれた最初の牝の子牛を町へ納める代わりに、貸付けられた親牛は無償で農家へ払い下げられました。

◇町営牧場の経営

町有地３ヵ所（延べ面積974ha）を開放し、新規移住者や肥育するための十分な土地を所有しない農家などに開放しました。

◇人工授精事業

北海道から種牛を借り受け、白老八幡神社の裏手に和牛人工授精所を建築しました。

◆最後に和牛導入時を振り返って一言、お願いします。

「今は企業畜産が増えていて、和牛そのものがとても注目されている時代。肉の質もボリュームも違う。交配の研究が進んだことで、成長も期待できる。

　現在の飼育環境と比べると、当時は縄文時代か弥生時代みたいな感じです。全く別の世界で一生懸命やっていましたから、最初の20年間はあっという間でした」

表：和牛導入から20年間の飼養状況の推移

	肉用牛		乳用牛		馬	
	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数
昭和30年	55	95	157	520	268	557
昭和35年	135	448	142	618	163	460
昭和40年	122	503	116	563	147	242
昭和45年	106	1007	66	444	83	110
昭和49年	120	1707	34	423	22	148

表：和牛導入から20年間の地区別使用状況の推移

	昭和 31 年		昭和 36 年		昭和 40 年		昭和 49 年	
	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数	戸数	頭数
社台	8	13	14	26	11	20	13	156
森野	7	10	7	18	6	14	4	64
白老	26	52	71	247	57	273	43	568
石山	20	51	22	62	22	78	24	547
萩野	15	18	12	25	8	26	7	74
竹浦	21	32	39	89	18	92	27	286
虎杖浜	3	8	12	21	0	0	2	12
計	100	184	177	488	122	503	120	1,707

表：和牛導入の20年後における町営牧場利用状況

	総数	内　訳			
		極東牧場	ﾖｺｼﾍﾞﾂ牧場	石山牧場	ポロト牧場
面積（ha）	1,004	264	447	196	97
草地造成面積（ha）	111	78	115	14	75
放牧頭数（頭）	450	150	150	100	50
利用者（人）	44	18	8	17	1

コラム③
『しまね和牛』

白老牛のふるさとである島根県では現在も牛の飼育が盛んで、なかでも和牛と乳牛が全農業産出額の８割近くを占めています。

古くは延長５(927)年の文献に、皇家へ牛乳を奏上した記録があります。中世から近世にかけては、中国地方で盛んだった製鉄に使う木炭の運搬、稲作や農耕のための飼育が行われていました。和牛の肥育は主に明治時代からで、西洋文化の影響で牛肉を食べる習慣が広まるにつれ、肉利用のための肥育数が増えていきました。

太平洋戦争の終結後、機械農業が広まるにつれて労働力でもあった和牛の需要が減るなか、島根県では販路拡大を図るとともに、稲作で生じる稲わらの消費を維持するため、北海道から乳牛を仕入れることになりました。

▲和牛導入20周年記念式典(昭和49年)

参考文献・資料

塚見秋夫「黒毛和種 導入五〇年のあゆみ(上)」『白老郷土文芸第24号』 平成６(2004)年

塚見秋夫「黒毛和種 導入五〇年のあゆみ(下)」『白老郷土文芸第25号』 平成７(2005)年

白老町名誉町民浅利義市顕彰会『根性 浅利義市伝』 昭和62(1987)年

白老牛銘柄推進協議会『白老牛』 平成11(2009)年

白老牛導入50周年記念事業実行委員会『白老牛50年のあゆみ』 平成６(2004)年

苫小牧郷土文化研究会「白老牛と私」『令和元年度年報』 令和元(2019)年

白老町農林水産課『白老牛ブランドの取り組みについて』 令和５(2023)年

島根県「しまねの畜産」 令和２(2020)年島根県畜産会『島根和牛の蹄の跡』 平成５(1993)年

書　籍　名	ふるさと再発見シリーズ８『黒毛和牛の事始め』
編集・発行	仙台藩白老元陣屋資料館（白老町教育委員会）
発 行 年 月	令和６(2024)年３月
問　合　先	仙台藩白老元陣屋資料館
	〒059-0912　白老郡白老町陣屋町681-４
	TEL(FAX兼)　0144-85-2666
	E-mail　jinya@town.shiraoi.hokkaido.jp